



## 話題の本棚

藤原辰史著『食権力の現代史 ナチス「飢餓計画」とその水脈』

パウル・ブッソ著、垂野創一郎訳『メルヒオール・ドロンテの転生』

## 特集／海

新刊コーナー／新書コーナー／私の本棚

〒606-8316

京都市左京区吉田二本松町 吉田南生協会館 2階

Tel: 771-6211 / E-mail: ku-teiyo@univ.coop

綴葉HP: [http://www.s-coop.net/about\\_seikyo/public\\_relations/](http://www.s-coop.net/about_seikyo/public_relations/)



UNIV CO-OP

京大生協

綴葉編集委員会

## わたしたちを取り囲む、食べさせること／飢えさせることの権力

### 食権力の現代史 ナチス「飢餓計画」とその水脈

藤原辰史著  
人文書院



正義がひっくり返りかねない世界にあってもなお、飢えた者に食べものを分け与えることは正義である——アンパンマンの原点にこだわった哲學があることはよく知られているが、その伝でいけば、意図的に誰かを飢えさせることは絶対的な惡であるということになる。なるほど、食べることは普遍の営みであり、食べさせることの愛と献身は描くがない。しかしそれゆえこそ、食べさせること／飢えさせること／普遍的な権力として立ち現れるのである。

こうした力は「食権力」と呼ばれ、本書では《食料や食料生産に必須のものを一局に集中し、それらを根拠に人間や自然を統治したり、管理したりする諸力の束》と定義される。本書は食権力の振るわれた飢餓の歴史として、現代史の叙述を試みる。

#### ◆ナチスとイスラエルを繋ぐ食権力の水脈

本書で取り上げられる話題は、第一次世界大戦時にドイツを襲つた飢餓から第二次世界大戦におけるナチスの意図的な飢餓、そして現在もなお進行しているイスラエルによって引き起されたガザの飢餓までの流れを中心として多岐にわたる。とりわけ注目したいのは、飢餓の被害者が飢餓の加害者へと変じてしまう構造だろう。飢えるのは二度とめんだ、というトラウマが、ナチスの食糧政策を生きるのは

動き動かし、食べさせると／飢えさせるとの選別を引き起こす。ナチスによる虐殺の背景にはそのような食権力が絡んでおり、イデオロギーだけでは決して説明できない。

けれども、食べることはあまりに普遍的なことであるために、かえって食権力の威儀は見過ごされてきた。《もう少し踏み込んで言えども、食べる》ことはあまりに普遍的なことなのであるために、「…」飢餓というグローバルな虐殺の実態を覆い隠し、解決を遅らせることを助長しているよう私には思える。こうして無視された暴力は、イスラエルによるガザの飢餓まで続いている。

#### ◆逃れることのできない食権力の【施設】

本書の議論を援用するならば、たとえば昨年から日本を騒がせたきた米不足と、それを受けての米の値上がりや備蓄米の放出は、まさしく食権力の場だったと云える。現代社会において、われわれの食卓は常に国家や企業による食の管理——あるいは管理しない——という権力に晒されており、食べなければ生きていけない以上、この権力の網目から逃れることは容易ではない。こうした社会は「施設」化していると著者は云う。もちろん「施設」で食が管理されることでもたらされる恩恵もある（学校給食など）。けれども「施設」化した社会で食権力が暴走した果てには、飢餓が待っている。

本書が主題としているのは、あくまでもドイツとイスラエルの現代史である。しかし、その深層に流れている食権力の水脈は、より複雑で巨大だ。この深み、出口の見えない「施設」の構造を捉え直すところから、われわれは考え始めなければならない。（水炊き）

## オーストリア幻想文学の傑作——魔術的幻想咲き乱れる巡礼の旅

メルヒオール・

ドロンテの転生

パウル・ブツソン著

垂野創一郎訳



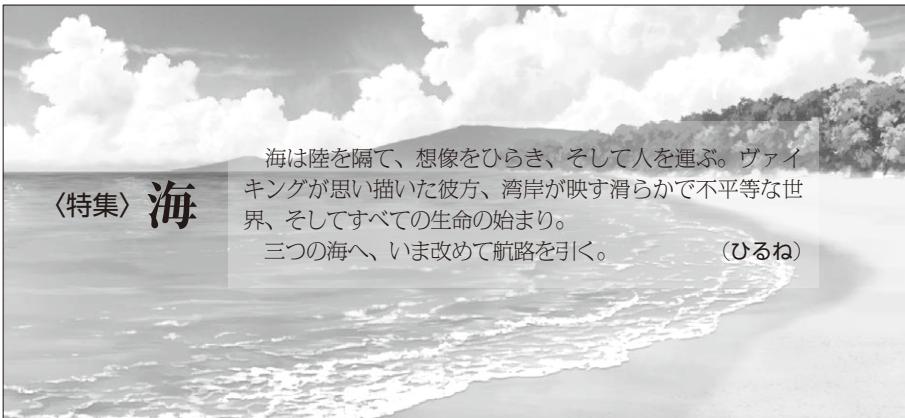
この小説は、螺旋を描いている。

ドロンテの歩みは様々な人物との再会を繰り返しながら進む。その螺旋は特に二人の人物を軸に廻る——回教僧エヴリと、幼馴染のアグライアだ。幼少期に死別したアグライアは、たどろくは悪漢から掬い出したとある少女に、あるいは旅籠屋の部屋の肖像画に、姿を変えたびも彼の前に姿を現わす。彼の情愛の遍歴は、ありし日

のイコンたる彼女の面影を探す旅にほかならない。またドロンテは亡きアグライアを追い求めながら、同時に回教僧エヴリの存在へと近づいてゆく。回教僧は自らをイサ（救世主イエスのトルコ語読み）と称し、ドロンテに云う、「すべてはあなたの浄化のためです」。これはドロンテの、現世という煉獄の山を登り永遠の生へ到達するための巡礼の旅なのだ。そのための聖化された触媒たる乙女アグライアは、西歐文學ではペアトリーチェの、マルガレーテの、そしてアウレーリエの変奏である（評者はこのドロンテの遍歴を、ホフマン『悪魔の靈液』のメダルトゥスのそれと重ね合わせずにはいられない）。そんな煉獄を登る巡礼の最後の地はフランス革命下のパリ。斬首台の刃という究極の終着点を経て、ドロンテはエヴリとの同化を果たし、ゼノン・フォラウフとして転生する——螺旋は頂点で収束する。

『廃墟建築家』『男爵と魚』に続くオーストリア綺想小説コレクション第三冊は、訳者曰く「オカルティズム博覧会」だ。一八世纪ドイツの秘教世界と東方の魔術的觀念に彩られた夢幻のパノラマが拡がる、二〇世紀オーストリア幻想文学指標の傑作。

（猫足）  
が何度も道行く先に姿を現わすことになるのである。  
愛欲と暴力の彩る粗野な現実と、黒魔術やサバトなど闇の幻想が  
交錯するなか、神祕はあるで影のように彼の歩みにつきまとう。秘  
密に満ちた出会いの円環、その果てにドロンテを待つものは何か。



〈特集〉 海

海は陸を隔て、想像をひらき、そして人を運ぶ。ヴァイキングが思い描いた彼方、湾岸が映す滑らかで不平等な世界、そしてすべての生命の始まり。  
三つの海へ、いま改めて航路を引く。(ひるね)

三つの海へ、いま改めて航路を引く。

(ひるね)

歴史を振り返ると、自らが生活を営む陸地を後にして、海を渡った人間が大勢いたことは明らかだ。例えば、中世北欧のヴァイキング。ノルウェー最初の統一者、ハラルド美髪王の治世、圧制を嫌った誇り高き豪農らはアイスランドを目指した。自由を求めた彼らの目に海はどのように映つただろうか。

◆想起され、語られた海

アイスランドに入植した人々はその後貴重な文献——エッダとサガ——を現代に残す。

谷口幸男著『エッダとサガ 北欧古典への案内』は、これらを体系的に紹介する一冊である。

「エッタ」は、ノルウェーに伝わる神話や英雄伝説が入植によりアイスランドに持ち込まれたもので、「北欧の自然」とゲルマン人の「民族性」がよく反映されているといふ。

このエッダ神話において「海」は巨人ユ

医道遺書  
谷口幸男著  
北歐食風の内幕  
エツダとサガ

海の向こうを思い描く——中世北欧ヴァイキング

ミルの血が作られ、そして海の神エーゲルは巨人族の出身だと歌われる。本書が指摘するように、ギリシア神話では神々に敵わない巨人族が、エッダ神話では、遙れば神々の淵源であり、神々と対等なばかりでなく世界の終末では相討ちになり神を滅ぼす存在とされている。そうだとすると、海がときに神々でさら恐怖する巨人族と結びつけられている点は興味深い。オーディンは災難を招くミズガルズの大蛇を海へと投げ込み、神々に追われて鮭の姿で逃げる口キは、間近に迫った海を避けて追手の方へ引き返す。エッダに語られる海からは、人々が海へ向ける畏怖の眼差しが感じられる。

しかし人々は海を恐れてばかりではない。彼らは海で漁をし、航海を繰り返した。「サガ」で語られるのは、現実に目の前に存在する超え（あれ）るべき対象としての海である。

十二、三世紀頃から記され始めたこの散文物語は、優れた文学作品であると同時に「歴史的な記録」としての評価も高い。アイスランド入植の始まりを語る『入植の書』、詩才を中心とする『エギルのサガ』など約二百篇ほ

じ残るこのサガ作品群からは、海を越える」とで物語——彼らの人生が展開していくことかがわかる。

彼らがあまりに頻繁に航海するものだから忘れてしまいそうになるが、海を越えるとは決して簡単なことではなかったはずだ。『エギルのサガ』には処刑前に助命を願い王に頌歌を捧げる場面がある。エギルは「西に向かい、海を越えて余は来れり」と始める。命を懸けた朗唱の第一声に海を越えて来たという表現が選ばれていることに注目したい。(首

の身代金)と呼ばれるエギルの命を救つたこの詩からは、当時の人々が共有していた航海の困難とその価値が推察される。

◆生活の先に思い描かれる海  
ここまででの〈語られた海〉を歴史の実像と結ぶ一冊として熊野聰著『ヴァイキングの歴史——実力と友情の社会』が挙げられる。本書は、考古学史料やその他文献と一致する範囲でサガの史料的価値を認め、豊富な具体例としてその記述を用いる。そして野蛮な海賊ではなく「一般的な生活者」としてのヴァイキング像を提示する。

八世紀に彼らの船に龍骨が採用されたことで遠距離航海は始まる。熊野はその船に乗り



○海に翻弄される港と人びと  
基隆港の朝は早い。午前三時、「路傍の街灯の下には二軒の屋台が隣り合い、それぞれときさまとステーの用意をしている」。すっかり明るくなった午前九時、屋台の女性はステーをかけ混ぜながらいった。「基隆港はとつとに『死港』になっちゃったんだね」。『静かな基隆港』は、世界の物流を下支えする港に生きた人びと、そして変わりゆく町を丹念に描き出す極上のエヌグラフィだ。

台湾北部の町・基隆は、日本統治時代に、南方の貿易地と日本をむすぶ積み替え港として栄えた。労働機会を求めた男たち



## 港湾・コンテナ・難民——滑らかで不平等な海

込んだ漕手の存在を指摘している。「自分の本來の生活本拠の外へ掠奪にでかける」というヴァイキング活動は、この漕手を含む「家人」を養う手段の一つであった。ヴァイキング活動の主体は自立した農民たちである。彼らは農場経営に補充する経済活動として海を越えた。

このようにヴァイキング活動を生計の一部と捉え、彼らの社会を再構成することで、それを伴つたものではない」とされている。彼らが思い描いた海の向こうは、きっと夢物語ではなかったのだろう。「こゝではないどしか」を思つて海を眺める眼差しは確かに行き先を捉えていたのかもしれない。

(ひるね)

の航海が無謀な冒険ではなかつたことが見えてくる。自由を求めて飛び出したかのようにみえたアイスランド植民も「当時の北欧の社会的組織と技術をもって行われ、特別の飛躍を伴つたものではない」とされている。彼らが思い描いた海の向こうは、きっと夢物語ではなかったのだろう。「こゝではないどしか」を思つて海を眺める眼差しは確かに行き先を捉えていたのかもしれない。

は全国から港湾に集まり、貨物の荷役作業に従事した。時間を問わず港に出入りする船に合わせた不規則な労働形態から、男たちは基隆の地元社会や家庭から離れ独自の社会を形成していた。彼らは同郷ネットワークや労働組合によって強く結束し、家に帰るよりも茶屋やカフオケ店で船待ちの時間をつぶしたり、人員の調整をしたりしていた。経済を動かすグローバルな物流の最前線を担当彼らは、経済発展を支える誇りを胸に働いていた。

一九七〇年代、港湾にコンテナが導入されると、基隆港の労働環境は一変する。手作業による荷役は、巨大なキリンのようなガントリークレーンと、トレーラー車に代替されてしまった。最終的に、一九九九年の埠頭の民

當化によって、労働者たちの多くは港湾労働から完全に追い出された。それは職と収入の喪失だけでなく、生活のリズムや仲間との付き合いが断ち切られることが意味していた。

繁華街に通う日常は消え、男たちは、家族との時間を過ごすようになる。ほとんど関係を構築してこなかった子どもと妻の前に、收入を喪失した状態で現れた男たちは、おのれの無力さに打ちひしがれたのだった。

#### ○海を移動する滑らかな箱

基隆港の「死」は、ひとつの町の終わりであると同時に、世界の始まりでもあった。経済史家レビンソンの『コンテナ物語』は、コンテナ化がどのようにして世界経済の仕組みそのものを塗り替えたかを描く。コンテナは貨物を標準化し、積み下ろしにかかる時間と費用を劇的に減らした。港で数日を要した作業は数時間で終わり、輸送コストは製品価格のわずかな比率にすぎなくなつた。企業はもはや「どうで作りどこで売るか」を地理に縛られず決められるようになったのだ。

コンテナがもたらしたのは、モノの匿名化だった。鉄の箱に封じられた貨物は、送り主も作り手も内容物も見えないまま、世界を移動する。労働者が中身に触れることもなく、コンピュータ上では識別番号として管理され

る。誰が作り、どこで積まれ、どんな海を渡ったのかは、見ても分からない。海はいまや、静かに循環する資本の回路となつたのだ。

#### ○監視と分断の海

しかし、その静かな海の回路には、別の現実が潜んでいる。二〇一七年、リビアの町フムスで、欧州行き貨物コンテナの中から十三人の移民の遺体が見つかった。コンテナの不可視性は、検問を逃れる手段となつていて。

『亀裂 欧州国境と難民』が提示するのは海のもう一つの姿だ。写真家スポットルノと記者アブリルの二人は地中海から東欧の国境地帯まで、難民と移民が押し寄せる境界に赴き、「要塞化」するヨーロッパの姿を



## 海は生きていく——生命と心の起源と未来

ここまで、海と人との関わりが語られてきた。食糧や資源の在り処、あるいは移動経路として、われわれの生活は海とともににある。

◆われわれはどこから来たのか

『生命と心は水中で始まり、私たちの身体を構成するすべての細胞には海が宿っている』——そう語るのは、熟練のダイバーといふ顔も持つ哲学者ピーター・ゴドフリー＝ス

記録する。全コマが写真で構成されたグラフ、イックノベルは過酷な現実を映し出す。

ヨーロッパを囲む海は監視と隔離の境界になつている。イタリアンチユニジアの間の海峡では、多発する密航船の海難事故を受け、救助作戦が実行されていた。悪質な仲介者はちは難民たちを劣悪な船に詰め込んでいたのだ。何とか浮かぶ船の上で陥しい表情。彼らは海に怯えていたのだろうか。

現代において、海は世界を繋ぐ場になつている。そのつなぎはかつてないほど滑らかで、そして不平等である。誰が渡れるのか、何が渡れるのか。そこに映し出されるのは、資本の流れを優先し、人の生を選別する世界に他ならない。

(たいやき)

現代において、海は世界を繋ぐ場になつている。そのつなぎはかつてないほど滑らかで、そして不平等である。誰が渡れるのか、何が渡れるのか。そこに映し出されるのは、資本の流れを優先し、人の生を選別する世界に他ならない。

◆われわれはどこから来たのか

『生命と心は水中で始まり、私たちの身体を構成するすべての細胞には海が宿っている』——そう語るのは、熟練のダイバーといふ顔も持つ哲学者ピーター・ゴドフリー＝ス

ミスである。海が生命の起源であることはよく知られる。われわれ人間もまた、進化の系譜を遡れば海のなかに辿り着き、実際、いまも海中にはカイメンのような生き物で原始的なたちの生命が息づいている。では、かれら海綿動物は「心」を持っているだろうか。持っているとすれば、どのようなかたちで? 持っていないとすれば、進化の系統樹のいつたいどこで、生物は心を獲得したのだろう? いずれにせよそれは、命と同様に、海からやつて来たはずだ。ゴドフリード・スマスは『メタゾアの心身問題』において、海の生き物と戯れながら、心の起源、生き物にとっての意識の在りようを考察する。ここで云ふMetazoaとは、多細胞生物のことを指す。つまり、動物一般だ。

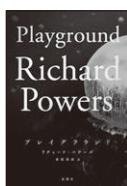
カイメン、サンゴ、イソギンチャクにヤドカリ、エビやタコやイカ、そして魚……。海に棲むそれら多様な動物たちについて、ゴドフリード・スマスはエビには心があつてサンゴにはない、というような切り分けをしない。また一方で、汎心論の立場も採らない。唯物論と生態学に拠つて立つの考えによれば、心の発生はグラデーションを持っている。それは刺激に対する反応から始まり、進化を通じて感覚に対する経験が複雑に編み上げられて生まれてくるものだ。



逆に云えば、人間のような心を持たずとも、海の生き物はそれに違つた方法でその生を経験しているのかもしれない。タコは腕一本一本がある程度自律性を持つているといふ。であるならば、タコには世界がどのように感覚されているのだろう? こうしたことを想像するととき、われわれの感じている世界もまた、ぐつと広がるようと思つ。

#### ◆われわれはどうへ行くのか

自然科学と哲学が融合合うこの境地で小説を書き続けてきたのが、リチャード・パワーである。彼の最新作『フレイグラウンド』が主題としているのは、ずばり「海」だ(謝辞にはゴドフリード・スマスの名前もある)。南国の島に、海洋都市を建設する計画が持ち上がる。島の未来をめぐって住民投票がおこなわれるなか、小説はたびたびイーロン・マスクとマーク・ザッカーバーグを掛け合わせたよくな長者の回想が挟まれる。ふたつの物語がどう絡み合っているのか、それは読んでのお楽しみだけれども、ひとつ云えるとすれば、前者が海とそこに住まう生き物たちの驚異を語る一方で、後者はそこに、



A.I.をもうひとつテーマとして投げかけている点が大きな見どころだ。A.I.は心を持つのか? A.I.はこの地球に何をもたらすのか? われわれはどうへ行くのか?

小説のトーンは、全篇通して暗い。もちろん、海に対する高揚はパワーズらしい知的興奮に満ちた文体で綴られる。しかし、その豊かな海はいま、失われようとしている。登場人物のひとりである年老いた海洋学者は回想する——《地球規模で海水が酸化し、世界のサンゴ礁の大半が白化し、海底鉱物資源開発の始まりとともに生きた深海の心臓が割かれること》が語られる。島の死にゆく惑星で、何を語ることがができるだらう? 海洋学者がぶつかる壁に、パワーズもまたぶつかる。すでに失われた、そしてこれから失われるすべての命への哀悼——それがこの小説だ。

しかし、小説は決して絶望で終わらない。『海ははずっと展開し、ずっと探索し、ずっとさまざまな形を試していく。そして海はいたるところに、周囲にあるものについて忙しく語っていた。〔…〕それはつまり、生きとし生けるものすべてといつこと』。海も、人間も、そしてA.I.も、すべての存在は遊ぶことをやめない。海に戯れ、これまでにないことが試される。そこには未来がある。われわれはそうして、新しい海へ漕ぎ出す。(水炊き)

# 新刊コーナー

## よくわからないまま輝き 続ける世界と 気がつくための日記集

古賀及子著

大和書房



日記をつけ続けていた。生活の記録と、よりも気持ちの整理のために始めたもので、どれだけ効果があるのかはわからなければ、特段辞める理由もないままに三年日記は二冊目に差し掛かってしまった。

私の日記事情はどうでもいいとして、本書はいわゆる日記エッセイと呼ばれるものだ。

著者は都内では息子・娘と一緒に暮らすライタ

ー。彼女の日々の暮らしの断片が綴られているのだが、例えばご飯の炊き方をめぐる一節。

「炊飯器を使わずコンロで炊くのはそれなりに聞く話だ。けれど、どこか私には、炊飯器ではないツールで炊飯するの上手に生きている人間がやることであって、私がやっていいことではないという卑屈な偏見がある。」

うわあ！卑屈だ！（結局著者はフライパンで美味しくお米を炊きあげていたのだが）

でも、それが許されるのが日記という（基本

的には他者に開示されない）文章の魅力だろう。そこから広がる著者の感受性がなんともびやか。生活のなかの些細な変化、そこに立ち現れる過去の思い出と家族の未来。自分宛に書いた文章が持ちうる尊さというものが、あって、その無責任さが心地いい時もある。この本を読み終えて、日々を記すという行為はどうすれば流れ去っていく出来事の面白さと美しさに「気が付くため」で、日記はそのまま輝かせるレンズなのだろうと思った。されば、汚い字で書き殴った私の日記もそれなりに輝いて見える。（浅煎り）

（二八八頁 税込一八七〇円 6月刊）

## 変わり者たちの秘密基地 国立民族学博物館

樺永真佐夫監

ミニパンクチャヤン著  
CMEメディアハウス



大阪・吹田市にある

国立民族学博物館

（通称・みんぱく）

に行つたことはありますか？ じつはただの博物館じゃないんです、「民俗学と文化人類学の国際研究拠点」なんです。

ここで展示されている、あるいは収蔵庫に

収集されている資料は、全て研究することを目的に集められています。展示物は初代館長のこだわりにより、ほとんどが露出展示。実際に世界各地でそこに住む人々が使用しているものが展示してあるので、においや質感を含めて様々な感覚を駆使して楽しむことができます。たしかに遊牧民のテントとか、少し大きになかったみたいですが）

さて話は戻りますが、みんぱくは研究所なので、多くの研究者が在籍しています。本書では、みんぱくの設立理念や展示内容の独特さの紹介はもちろんのこと、みんぱくに在籍している七名の研究者への取材に基づいた話が描かれています。それぞれの研究者の研究人生……なんで研究者になったのか、研究者になってからどんな苦労があったのか、どういう理由で研究テーマにたどり着いたのか。「フィールドワークが偶然に支配されている」という言葉通り、ありえないほど十人十色の内容が詰まっています。

意外と知られていないですが、京都大学の学生はキャンパスメンバーズなので、入館無料なのです。行ったことがある人もない人も、短くて二時間、長くて一日の時間を要する展示を堪能してください！（フラチ）

（三五二頁 税込二二〇〇円 9月刊）

私たちに名刺がないだけで

仕事してこなかつたわけじやない  
韓國へて住二らの効勤三呂口一

韓国女性たちの労働生活史  
京郷新聞ジエンダー企画班著 すみ・尹怡景訳  
大和書

卷之三

成長、そして現代まで、激動の韓国社会を、働いて、働いて



支えてきた女性たちがいた。彼女たちは、幼いころから家事や工場労働に従事した。結婚すると夫の家族に組み込まれ、専業主婦にならざるを得なかった。子育てや日々の家事労働、さらには義理の両親の介護まで、期待される役割をこなしながらも、彼女たちは合間に時間で様々な仕事をし、家計を支える。本書は、老年を迎えた女性たちの「ありふれた」苦労話を記録するインタビュー集だ。「ほら見ろ、これが女性の人生だぞ」。

貢を開くと、カラフルな紙面と力強い女性たちの写真に目が魅かれる。新聞の連載記事がもとになっており、記述はとにかく厚い。

麺料理屋、果樹園の倉庫、リビングルーム。対話形式の文と写真が交互に並ぶレイアウトによって、彼女たちが生きてきたその場所で記者に自らの人生を語り、記憶をひきいていくのが聞こえてくる。朝から晩まで働きながくのものが聞こえてくる。

## 絶滅の発見

マーティン・ジヤナル著

シヤナル著  
真鍋真訳  
創元社



生命の起源とか、

シトの誕生とかは、  
になって調べること

が多いが、絶滅と

うせ遙か遠い昔

現在、大量絶滅

らも、社会的には「仕事」とは認められず、  
隆二の立場が強調される。『同上』を参考

轉んでいた。『名刺』をわたなし彼女たちが担つてきの仕事の多さには圧倒される。だからこそ、「果樹園代表、婦人会長、財託マスター、家事労働者」のように、一人ひと

り仕事を名刺にする演出は珍だ。  
会間のコラムでは、時代背景や、韓国労  
働市場の変化について解説され、女性の置か  
れた状況や、労働力の重要性がよくわかる。

読んでいると「日本の女性たち」田や植田の顔が浮かぶ。この「これまた」という言葉に

の顔が浮かぶ。私がこれまで支えてくれてきた  
彼女らの苦労に思いを馳せた。（たいやき）

こういったミクロな話だけでも面白いのだが、本書は大量絶滅についても解説する。過去五回あつたされる大量絶滅について、当時の生物多様性がどうであつたか、どんな種の生物が絶滅したか、何が原因か、などが詳述されるので、それぞれの違いを学びながら読める。完全でないにしろ数億年前の出来事がここまで詳しつかにされていて感動するだろう。

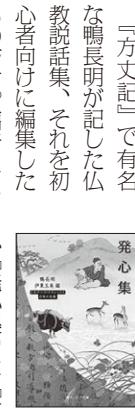
全体として教科書のように流れを追った説明になつており、読み物として楽しめる構成になつてるのでどんどんページをめくつていける。余談になるが、絶滅という恐竜を連想する人は多いだろう。本書では「絶滅するべくして絶滅した存在の代表的な例」と腐されていてなんか少し悲しい。

(一四〇頁 税込三〇八〇円 10月刊)

## 発心集

ビギナーズ・クラシックス日本の古典

鷗長明著 伊東玉美編  
角川ソフィア文庫



『方丈記』で有名な鷗長明が記した仏教説話集、それを初心者向けに編集したものです。編者によると、「発心集」は『方丈記』を書いた鷗長明が、その後亡くなるまでの四年の間に著したもので、当時の説話集の常識に反し、典拠の提示もインド・中国の説話の採録もしませんでした。

著者と読者にとって身近な時代・場所を舞台にしたもので、しかも長明が聞いてじっさいに心を動かされた話だけを収めるという方針は歓迎され、当時から多くの読者を得ていたようです。

評者が読んで心を惹かれたのは、次から次へと、何の役にも立っていない人、何の生産もしていない人が出てくることです。しかもただ出てくるだけではなく、素晴らしい仰ぎみるべき人物として称賛されている……

勿論それは今の価値観から見てのことですが、家も職も捨ててホームレスになることも、死ぬまで部屋に籠って念佛を唱えつづける

本書は水村美苗が二〇〇九年から様々な場所に執筆したエッセイと講演などを集成したものです。夏目漱石と谷崎潤一郎を中心とした日本近代文学についての（学術的とも言える）分析から身辺雑記的なものにいたる多彩な内容は、本書が基本的には時系列に

とも、尊い修行なわけですが、もし彼らが今の京都にいたら（彼らのこの世への執着の無さを称する長明も一緒に）何らかの治療をすすめられているだろ？と思わざるを得ません。この本には、下鴨神社の神職の家に生まれ、大原、そして日野に暮らした著者らしく、京都の地名がたくさん出てきます。忙しく過ぎる日々のなか、八〇〇年前にはこの土地にこんなに違う感性・人生觀をもった人々がいたのだと想像してみると、悪くないかもしれません。

（一九九頁 税込一二一〇円 8月刊）

（投稿・貸出更新）

## 無駄にしたくなかった話

水村美苗著  
筑摩書房



このように視点に立つて本書を読み終えた時、読者は最後に収録された日記が、冒頭の「無駄にしたくなかった話」で描かれる旅行を予告していることに気づくだろう。つまり、時系列という観点で見るならば、本書の本当の終わりは、「無駄にしたくなかった話」の終わりなのだ。再読によって初めて姿を現すこの円環は、流れ去る時間を受け入れつつも、あくまで抗うことやめない。

（追記）本書の中には過去の京大男子による著者への失礼な言動が描かれています。（僕を含む）京大男子の皆さん、女性には礼儀正しく振る舞うように！

（三八四頁 税込一五三〇円 9月刊）  
（コーク）

従つて並べられることでその多彩さを際立たせる。やもすれば乱雑になりかねないこの構成に一貫性を与えるのが、「侵食するものとしての時」というテーマだ。本書がカバーする十五年余りは、作家が母と姉を見取った時間でもある。

日記と分析と追悼とが隣り合つとき、私たちは抽象的な分析にも、時の刻印がはつきりと押されていることを悟るだろう。ときに客観的な文体で書かれていても、すべては人生の一部であり、常に終わりに向かう中でなされた仕事なのだ。

この日記は最後に収録された日記が、冒頭の「無駄にしたくなかった話」で描かれる旅行を予告していることに気づくだろう。つまり、

時系列という観点で見るならば、本書の本当の終わりは、「無駄にしたくなかった話」の終わりなのだ。再読によって初めて姿を現すこの円環は、流れ去る時間を受け入れつつも、あくまで抗うことやめない。

（追記）本書の中には過去の京大男子による著者への失礼な言動が描かれています。（僕を含む）京大男子の皆さん、女性には礼儀正しく振る舞うように！

# 昏い時代の読書 宮嶋資夫から野坂昭如へ

講談社選書メチ工  
道旗泰二著



「人間がだめになつたんですよ。張り合いか無くなつたんですよ。大理想も大思潮も、タカが知れてる。そんな時代になつたんですよ」——太宰治がこう嘆いて数十年。現代はますます行き詰まりを迎えた「昏い時代」だ。「くたばれポストモダン」と声を荒げる著者は、大正から平成にかけて筆を執つた五人の作家の作品のうちに、現代という出口のない泥沼の先触れを見出す。冒頭に引いた太宰のほか、宮嶋資夫、坂口安吾、桐山麗虹、野坂昭如の作品が丹念に繙かれる。いずれにも目を覆いたくなるような絶望と死の硝煙が立ち込めてるが、著者の力強い筆致と芯のある分析が読者を物語の奥底まで導く。今では忘れ去られた作家の生涯も仔細に辿られており、死者の魂を呼び起こそうとするかのようである。

では、彼らの文学は、そしてそれを読む」とほこの「昏い時代」に何をもたらすのか？ 著者の答えはこうだ。「何ももたらさない」。

「人間がだめになつたんですよ。張り合いか無くなつたんですよ。大理想も大思潮も、タカが知れてる。そんな時代になつたんですよ」——太宰治がこう嘆いて数十年。現代はますます行き詰まりを迎えた「昏い時代」だ。「くたばれポストモダン」と声を荒

五人の文学を貫くのは挫折だ。彼らの怒りも絶望も叛逆も、現実を前にむなしに破れ去る。それを容易に公式化し、分かりやすい効用に結びつけるのはお門違いだろう。むしろ、挫折を挫折のまま描ききること、それによって危機的な現実を浮かび上がらせることが——これが文学の持つ力なのではないだろうか。彼らの挫折は、現代社会を覆い隠す上層面だけの理想や思想を吹き飛ばし、赤裸々な現実を突きつける。それを目をそらさずに見つめること、それこそがこの「昏い時代」に必要な読書なのだ。

(一七) 頁 税込 1410円 8月刊)

## 二十一世紀の荒地へ

酒井直樹／坪井秀人著  
以文社



奇妙な本だ。酒井直樹と坪井秀人、現代日本の碩学二人による「文学」や「言語」「政治」や「歴史」をめぐる対談集、と言えば聞こえは普通だが、奇妙なのは、一回目の対談と二回目の対談のあいだに約二〇年もの歳月が流れていることである。

(四五) 頁 税込 4400円 6月刊)

最初の対談は二〇〇一年。九・一一の混亂の最中だった。次の対談は二〇一二年。コロナの混亂の最中だった。読者として考えざるを得ないのは、この二〇年の開きが本書に何をもたらしたのか、である。そして私なりに言えば、そこにもたらされたのは、「荒地」としての「二十一世紀」という視座である。

最初の対談は、T・S・エリオットの「荒地」と、戦後詩の運動「荒地」をめぐるものだった。しかし二回目以降の対談では日本語、國民語、天皇制、國民國家といった主題が前面に浮上する。一見、これは初回の対談から逸脱に見えるが、これら新たな主題は排外主義や植民地主義がいまだ跋扈する「荒地」としての「二十一世紀」への応答である以上、「荒地」を鍵語とする本書の圈内にあるのだろう。

九・一一の犠牲者には外国人が多く含まれるのに、彼ら／彼女らを合衆国国旗と愛国歌で一律に弔うことの暴力性。あるいは関東大震災の発生時、「一五円五〇銭」が言えず虐殺された朝鮮人の死を悼んで、「押し付けられた日本語」の代わりに「純粹な朝鮮語」の回復を目指した壱井繁治の裏返しの純血主義。

二人の切り込みはじつに鋭い。そしてその鋭さは「二十一世紀の荒地」を生きた二〇年の歳月によつても磨かれたのだろう。(ぱや)

## 完訳 フィッツジエラルド伝

アンドルー・ターンブル著

永井定夫・坪井清彦訳

中央公論新社

早すぎた成功、失意の長い年月、希望に手を延ばし続けながらの最期——フィツジエラルドの人生は一編の物語だった。



フィツジエラルドの人生は一編の物語だった。だから、彼を描く伝記はいつも「物語」として我々に迫ってくる。もちろん、記録としての役割も止めることはないのだけれど。著者ターンブルは、本書を「この物語」と呼んで語り始め、そして、作家の幼年・青年期、それに続く栄光の時代が描き出されてゆく。

## 悲劇とは何か

テリー・イーグルトン著  
大橋洋一訳  
平凡社



悲劇。この語が意味するところは二種類ある。すなわち

演劇ジャンルとして

「悲劇」、そして日常的な用法における「悲劇」。本書が問う悲劇はこの二つの意味を横断する。悲劇とは何か？

この問いを論ずるにあたって、まずは定義

じ込んでしまって、そんなところがあった』。我々の脳裏に、ギャツビーの微笑が、ディック・ダイヴァーの眼差しが、フィツジエラルドと『重写』に蘇ってくる。

『平和社』を離れたのちの一〇〇ページで描かれる作家の人生は再び三人称で進んでゆく。しかし結末——作家の葬儀のシーン——

には著者ターンブルが立っているのだ。フィツジエラルドの人生とターンブルの人生がもういちど交わり、ターンブルはニックのように、故人の肖像を描き始める。(コーケ)

(五四四頁 税込三三〇〇円 8月刊)

が問題となる。しかし、「悲劇ほど執拗に理論化してきたものはないが、(中略)悲劇ほど、理論と実践とのはなはだしき乖離を露呈させる芸術形式もない」。今日に至るまで様々な悲劇の定義が提示されてきたが、実際に要件を満たす作品は少数だ。アリストテレスの『詩学』以降、この傾向はずっと変わらない。重要なのは定義そのものではなく、批評家たちが何を見出したか？ といつこだ。著者イーグルトンはドイツ哲学の悲劇論を中心とした膨大な批評、そして実際の作品を自由に引用しながら議論を開拓し、五つの章が扱う主題は多岐にわたる。悲劇の死、自己と他者、過去と未来、虚偽と眞実、闘争と和解。あらゆる観念が入り混じる。そして悲劇という芸術に関する議論はいつの間にか、我々の生、実存に関する議論に行き着く。悲劇はまさに「偉大な芸術と、もっとも根源的な道徳・政治的問題とが、緊密に交錯する場」としてある。

およそ人間の存在するといふ、その規模の大小にかかわらず「悲劇」が絶えることは決してない。我々が悲劇とそれをめぐる議論を学ぶことは同時に、このままでも悲劇的な世界で生きていく為の態度を学ぶことでもある。その価値は、必ずある。

(三二〇頁 税込四九五〇円 8月刊) (荒畠)

## 締切と闘え！

島本和彦著  
ちくまプリマー新書

## カウンセリングとは何か 変化するということ

東畑開人著 講談社現代新書

明日はあれの締切で、それが終わったら明日はあれが締め切りで……。そんな日々だが、本書を手に取ったら変わるかもしない。しかし冒頭から「まず机にしがみついてやるべきことをやれ！」と一喝されてしまった。救いはないのか。

本書は締め切りと闘い続けてきた漫画家が、いかにピンチを乗り越えてきたか、どういうメンタルで仕事をしていたのかを書いたものである。こうすれば効率が上がるみたいなのハハウ本ではない。具体的に書かれていることといえば自分の能力を把握するという至極当然のことぐらいだ（それが難しいから苦労しているわけだが）。

締切の本というよりは、仕事の本であるようを感じる。漫画家という仕事の大変さが生々しく伝わってくる。編集者に面白くないと言われた話が何度も出たことか。そういうエピソードの方が締切なんかよりもずっと読みて辛い。ただ締め切りに追われていても、いつかは生き延びるために他者と向き合って話をしない問題に思えるだけというのが取るに足らない問題に思ってきた。

(二〇八頁 税込九九〇円 10月刊)

(竹輪)

(四四八頁 税込一五四〇円 9月刊)

## 考古学の黎明

最新研究で解き明かす人類史  
小茄子川歩・関雄一編 光文社新書

心という領域を扱う仕事、カウンセラー。京大にも常駐する身近な存在ではあるものの、その内実は外からは見えにくいものだ。著者・東畑の問題意識は、現代の臨床心理学が専門的な学派に分化・発展してきた反面、全体像を捉えにくくなってしまったことにある。

ゆえに本書で問われるのは、原論——「カ

ウンセリングとは何か」。曰く、カウンセリングとは心の不幸を解析すること（謎解き）、現実を動かすこと（作戦会議）、心を揺さぶること（冒陥）など、多様な要素を持つ。いずれも面白いのだが、個人的に感得したのはその一連の過程の中核が「破局を生き延びる」という力にあること。人生に不意に訪れる心の死と再生の谷。クライアントの生活環境と人生の物語の双方に介入し、変化を手助けするところがカウンセリングの本質なのだ。

「話すことは離すこと」である。過去を物語るのは起きた出来事を現在から引きはがし、過去に置いておくのです」——なるほど。だからこそ人は生き延びるために他者と向き合って話をしないことを諦めない。（浅煎り）

(四四八頁 税込一四五〇円 9月刊)

(倉井)

生前カリスマ的人気を博した米国の人類学者、デヴィッド・グレーバー。彼が死に際に遺した大著『万物の黎明』は、数万年にわたる人類の進歩史觀を根本的に批判したことで人々に衝撃を与えた。しかしこの本、あまりにデカすぎて（二段組で七〇〇ページ！）読み通すのはかなり根気が要る。

そこでオススメしたいのが、この本。『万物の黎明』にショックを受けた二一人の考古学者・人類学者・哲学者が、それぞれの分野から応答を試みていく。立場も書き手によって様々で、グレーバーの主張をさらに詳しく理論化しようとする人もいれば、その記述が本当に史実に妥当かと疑義を呈する人もいる。通説して、たった一冊の本からここまで多くの論点が出てくるものかと驚く。

特に評者が感動したのが（誤解を恐れず言えども）新書にあるまじき情報量。かなり専門的な内容にも果敢に踏み入り、ハードルを下げすぎない姿勢に励まされた。『万物の黎明』の副読本としても、日本の人文學一般の成果論集としても読めるお得な一冊。

## 録音メディアと音楽

音楽を言葉にするのは難しい。それは、音楽を聴いたときに人のもつ印象がそれぞれに違うというだけではなく、聴くことと読むことの間の根本的なメディアの違いにも因るだろう。とはいっても、音楽も書物も、繰り返し聴かれ、読まれることで評価が定まり、共通見解（らしきもの）が形成されていく。音楽でいう書物にあたるもの、それは——近代以降という観点からすれば——蓄音機、レコード、CDといった録音メディアだといえる。いまや、録音なしでは音楽について考へるよりずつ難しくなった。やや遠回りではあるものの、こうした音楽と録音の関係とは何か（それは言葉と書物の関係と同じものか）、原雅明『アンビエント／ジャズ』（P・ヴァイン）を元に考えてみたい。

同書は、タイトルにある二つのジャンルの歴史を辿ることで、録音が音楽にもたらした変化を描いている。例えば、レコード産業が確立した六〇年代以降になんでも、ジャズではオーヴァーダビング（多重録音）によって音楽を作るのに一定の忌避感があった。それは、ジャズの本質がライブでのアドリブや即興演奏、奏者同士の相互作用にあり、ライブで再現できない曲を作ることほジャズの本質を見失うものとされたためだ（この「生音信仰」はなお根強い）。トランペッタ奏者のマイルス・ディヴィスは、こうしたジャズの潮流とは正反対に、多重録音がジャズにもたらす新たな可能性を死の間際まで探究しつづけた。自身のバンドメンバーを率いて、昼夜問わばスタジオにこもり、ほぼ毎年のようにアルバムを発表する中で、既存のジャズからは決定的な離反が起こる。過剰な多重録音は、レコードで聞く際に楽器の音同士がぶつからないよう、音の配置を

調整する必要を生み出す。録音はリスナー側の視点を生み出した。

音楽家のブライアン・イーノもまた、アンビエント（環境音楽）を通して、マイ尔斯の立場をさらに推し進めた。アンビエントとは、集中的な鑑賞と聴き流しのどちらにも耐えうるジャンルのひとつであり、イーノは度重なる実験を通してこのアンビエントの可能性を探索した。例えば、演奏のループ。長さや周期の比率が異なるボーカルや楽器の演奏を多重録音し、何十回、何百回とループさせることで、イーノは「音楽的な構造の維持・規則性」と「そこからのズレや揺らぎから生じる有機的なサウンド」の両極を一つの音楽に落とし込んだ。これが、「強い印象は残さないが繰り返し聴くことに向かわせる」という、独特な聴取体験をリスナーに与えるアンビエントを生み出したのだ。

ここにあって、録音はもはや、ライブで再現するための曲を極力生の音でレコード／CDに刻み込むという二次的な役割から解放され、それとはまったく別な領域を獲得したといえるだろう。それは、生演奏の似姿としての録音ではなく、それ自体で完結した、聴き方をリスナーに委ねる録音である。勘のいい読者ならすでに、これが文学理論でいう「読者共同体」の議論とおおむね重なっていることにお気づきかもしれない。書物にやや遅れた録音メディアの発展は、およそこうした考え方の「転回」を経て、今に至っている。

もう紙幅が足りないが、「転回」後の議論について気になる方は、庄野進『聴取の詩学』（春秋社）やデヴィッド・グラブズ『レコードは風景をだいなしにする』（ファイル／アート社）を読まれたい。もちろん、アンビエントを聞きながら読むのもオススメ。（倉井）

# 私の本棚

## 消えた出版社を追う——文学史へのアンチテーゼ

出版社、それはじつに儂い存在だ。吹けば飛んでしまって今まではないが、気づいたときにはもう、あの出版社も、その出版社も消えてる。とくに個人經營の小さな出版社（今なら「ひとり出版社」と呼ばれる存在）は、現わっては消えての繰り返し。まさに泡沫夢幻である。しかし（これは第三者だから言える放言だが）この儂さゆえの魅力というものが、そこには確実に存在する。そつした魅力を有する幻の「消えた出版社」、その足跡を追った一冊をこでは紹介したい。内堀弘『ポン書店の幻』（むかしま文庫）である。

一九一〇年代中頃から一九三〇年代初頭にかけて、このモダニズムの時代に突如現われ、その数年後、彗星のよう再び突如消えてしまったのが「ポン書店」である。



刊行者の名前は鳥羽茂。彼は「たった一人で活字を組み、自分で印刷もして、好きな詩集を作っていたらしい」。痛ましいほど小さな出版社だったが、ポン書店から本を出したのは、北園克衛、春山行夫、安西冬衛、中山散生など、戦前のモダニズムやシュルレアリスムを牽引することになる鋭々たる詩人たち。鳥羽はまだ無名だった彼らに目を付け、瀟洒な詩集や訳書（その多くは今では法外な古書値が付いている）を着実に刊行していくのである。利益はもうろくな出ない。むしろ赤字である。だがある詩人は言う——「ソロポンのはじけないような詩集をポン書店が出してくれたことが、どんなに詩文学のために役立ったか知れない」。

しかしこの鋭い目を持つた鳥羽茂とは何者だったのか、その段じ

ある。「やいじにはほんぶ」何の痕跡も残されていない「ひ」に本書の著者は気づく。「なぜ書物というものは著者だけの遺産としてしか残されないのである。幻の出版社といえば聞こえはいいが、実は本を作った人間のことなどこの国の『文学史』は端から覚えていないのではないか」。「まさに」に『文学史』というものの「…」には身を削るようにして書物を送り出した「刊行者」の存在など入り込む余地はない。これはじつに痛烈な（主流）文学史へのアンチテーゼではないか。古本屋を営む著者ほどの状況に抗い、わずかに残された痕跡を頼りに、鳥羽茂の姿をそこに甦らせようと試みる。その無謀な試みの記録が本書なのである。

最後に触れておきたいのは、本書の文庫化を機に付された「文庫版のための少し長いあとがき」について。本書が単行本で出てから約一〇年後、著者のもとに一本の電話がかかってきた。「私の母は、鳥羽茂の妹です」——それは鳥羽の親族からの電話だった。鳥羽の妹と息子がまだ生きていることを告げられた著者は、二人に会ったのち、その証言を手がかりに、鳥羽が死を迎えた場所、大分の田舎へと向かう。そこで著者が見たものとは何だったのか——それがこのあとがきには書かれている。その終わり方はあまりにも美しかった。「出来過ぎ」なども思うが、著者はそれを本当に見たのだ。

\* \*

長谷川郁夫『われ発見せり』（書肆山田）や、早田リツ子『第一藝文社をさがして』（夏葉社）など、「出版社」や「刊行者」の足跡を追った本は、数は少ないものの存在する。こうした仕事もまた、文学史の大切な仕事のひとつであると私は確信している。（ばや）

## 編集後記

最近（というか、二年くらい）考えていることがあります。それは、紙の本だけがもつ、「買う」ことの暗黙の権威についてです。

例えばアルゼンチンの代表的な作家・ボルヘスはいわゆる書痴（異常な本好き）で、すでに持っている本を書店で見る度もう一冊買いたくなる衝動に駆られていた（結局買ってしまう）という有名なエピソードがあります。ボルヘスの書痴具合を示すほほえましい挿話としてよく語られますが、ここで注目したいのは、本を「買う」という行為です。

突飛なように聞こえますが、実は本を買わなくとも蔵書を増やす方法があります。どうするか。簡単です。著作権が切れたものを紙に印刷して製本すればよいのです。そんな本で埋まった本棚を想像してみてください。なるほど古典はずらりと並んでいるが、なにか物足りなさを感じるのではないかでしょうか。実はこの物足りなさこそ、そこから「買う」行為が抜けているからだ、と言ったら多分言い過ぎかもしれません。しかし、ネットも電子書籍も普及した現在、書物がもうすぐ絶滅しなかったのには、紙の本を「買う」ことに對する社会の共通認識が関係しているからではないかと思ってしまいます。まあ、一から印刷するより手っ取り早いですし……（倉井）

——吉田知子の『お供え』がオススメです。三〇年前の小説なのですが、いまでも新鮮に怖く、いや／＼後味が残ります。（倉井）

（防災研・カルーナ）

## 当てよう！図書カード

あっという間に師走。2025年も終わりますが、師でもないのに忙しく走り回っている私は一体なんなのでしょう。さて走ると言えば毎年冬の京都で行われる全国高校駅伝ですね。歴代最多の優勝を誇る高校（男子の部）は、次のうちどれでしょう？

- |        |         |
|--------|---------|
| 1. 世羅  | 2. 仙台育英 |
| 3. 西脇工 | 4. 佐久長聖 |

（浅煎り）

《応募方法》 答えを書いた読者カードを、生協のひとことポストに投函してください。下記QRコードのリンク先 (<https://forms.gle/evEccphotDZiZURY7>) から応募することも可能です。正解者の中から5名の方に図書カードを進呈いたします。  
応募締め切りは1月15日です。



《8・9月号の解答》 8月号の問題の正解は、3. のシャープ兄弟でした。この試合があつた2月19日は「プロレスの日」という記念日になり、ファンにとっては今やプロレス史上の重要な一幕となっています。図書カードの当選者は、まだこないさん、パウエルさん、フミリンさん、いがさん、カルーナさんの5名です。当選おめでとうございます。

（倉井）

○生きて行くのがツライ…と思った時に、読むべき本を紹介してください!!

（天ebraそば大盛り）

参考になるかわかりませんが、サミュエル・ベケットの『伴侶』をオススメします。生と死の瀬戸際のような状態が延々と書いてある、ちょっと異様な本です。文全体の意味を理解するのはまったく不可能なのですが、ワードのチョイスが妙で、折に触れ読み返しています。『伴侶』を含め、ベケットの晩年の作品はどれも疲れたときにオススメです。

○あまりに暑いのでお盆は怪談で涼もうと何冊もまとめ読みしたのですが、ホラーではなく正統派の怪談を選んだので、不可思議で暑さから気は紛れましたが涼しくなりませんでした。まとめ読みすると自動的に頭の中で類型や派生の整理が始まってしまうので、他ジャンルの本と交互に読む方が楽しそうです。「幽霊小説アンソロジーへの招待」が面白かつたので次は幽霊小説に挑戦しようと思います。

読者からひとこと